アクセント史資料研究会『論集』V（2009.09）

『日本書紀』被訓注字の声点について

鈴木　豊

キーワード：漢音声点　被訓注字　漢風諡号　韻書　四声

要　旨：本稿は『日本書紀』声点本諸本の被訓注字に注記された声点について、声点注記箇所・注記位置についての整理を行ったうえでその注記時期や差声方式等について検討し、資料的性格を明らかにすることを目的とするものである。全30巻におよそ330箇所ある被訓注字のほとんどに漢音声点（漢音四声を表す声点。基本的に韻書の四声と一致する）が注記されている。それらの声点に関し、(1)諸本の声点注記の比較から被訓注字の声点は同一系統と見られること、(2)韻書の四声に合致するものが大部分であるがごく稀に韻書の四声と合致しない声点注記が存在すること、(3)例外となる声点には韻書の四声との間で去声と上声、上声と去声の対応関係にあるものが多いこと、(4)岩崎本の東点（平声軽点）注記例の存在から被訓注字に対する声点注記は六声体系の差成方式で始まったであろうこと等を明らかにした。なお、漢風諡号に注記された声点についても、一部を除くと漢音四声を反映する声点が注記されており、被訓注字の声点と同様の性質をもつことを指摘した。以上の考察を踏まえ『日本書紀』声点本の成立過程を推定した。

[1]はじめに

『日本書紀』声点本の音読漢字（呉音読と漢音読とがある）を全体から見れば、その多くは地名・人名で占められており、それらの大部分が呉音で読まれ、注記されている声点も呉音の四声を示すものと考えられる。その中にあって被訓注字の声点にはもっぱら漢音の四声を表す声点が注記されている。現存する『日本書紀』声点本諸本(神代巻…鴨脚本・弘安本・乾元本・嘉暦本・図書寮本・明徳本・丹鶴本、人皇巻…岩崎本・前田本・図書寮本・北野本・熱田本・兼右本・内閣文庫本)および『釈日本紀』の被訓注字の大部分に当たる317箇所560字(いずれも異なり数)に声点注記が見られる。また漢風諡号に注記された声点（『釈日本紀』では系図中に見られる諡号の声点）にも漢音四声を注記したものがある。小論の目的はこれら被訓注字および漢風諡号の声点について、諸本間の異同、韻書の四声との比較、差声方式、声点の注記時期等の検討を通じ、その資料的性格を明らかにすることである。さらに『日本書紀』声点本という一群の声点注記資料がどのようにして成立したのかについても考察を及ぼしたい。

[2]資料

〈表 1〉「『日本書紀』神代巻諸本被訓注字一覧」〈表 2〉「『日本書紀』人皇巻諸本被訓注字一覧」は被訓注字の声点注記例の全てを巻別・表出順に掲げ、資料ごとにいかなる声点注記がなされているかを一覧できるようにしたものであり、小考の考察のための基本資料である。具体的には声点の有無・注記箇所・注記位置・双点の有無・軽点の有無などの比較を行う。〈表 1〉は神代巻諸本として釈日本紀・鴨脚本・弘安本・乾元本・嘉暦本・図書寮本・明徳本・丹鶴本を、〈表 2〉は人皇巻諸本として釈日本紀・岩崎本・前田本・図書寮本・北野本・熱田本・兼右本・内閣文庫本を調査対象とした。

諸本の簡略な書誌情報（書写年次・書写者・残存巻・所蔵等）を以下に記す。

〈神代巻諸本〉

○鴨脚本（嘉禎本）……巻 2 のみ現存。嘉禎 2（1236）年写。国学院大学附属図書館蔵。

○弘安本……巻 1・2 が現存。卜部兼方写。巻二に「弘安九年春比重加裏書了」の奥書あり。文化庁蔵。

○乾元本……巻 1・2 が現存。乾元 2（1303）年、卜部兼夏写。天理図書館蔵。

○図書寮本…巻二のみ現存。南北朝頃写。宮内庁書陵部蔵。

○嘉暦本……巻 1・2 が現存。嘉暦 3（1328）年、曇春写。彰考館蔵。

○明徳本……巻 1・2 が現存。明徳 2（1391）年写。阪本龍門文庫蔵。

○丹鶴本……巻 1・2 が現存。嘉元 4（1306）年、神祇伯家本の書写本の模刻。

〈人皇巻諸本〉

○岩崎本……巻 22・24 の 2 巻が現存する。平安中期末写。文化庁（京都国立博物館）蔵。岩崎家、東洋文庫旧蔵。

○前田本……巻 11・14・17・20 の 4 巻が現存する。平安後期写。前田育徳会尊経閣文庫蔵。

○図書寮本……巻 2・10・12 ～ 17・21 ～ 24 の 12 巻（7 冊）が現存す　る。ただし巻 10 は声点注記がない。院政期写（巻 2 を除く）。宮内庁書陵部蔵。

○北野本……巻 3 ～ 13・15 ～ 30 の 28 巻（28 冊）が現存する。ただし巻 1・4・5・7・8・15 ～ 21 は声点注記がない。残存巻は第一類～第五類に分類される。第一類（巻 22 ～ 27）は院政時代写。第二類（巻 28 ～ 30）は鎌倉時代写。第三類（巻 4・5・7 ～ 10・12・13・15・17 ～ 21）は吉野時代写。第四類（巻 3・6・11）は室町時代写。第五類（巻 16）は江戸時代写。北野神社蔵。

○熱田本……巻 1 ～ 10・12 ～ 15 の 14 巻が現存する。永和元（1375）～ 3（1377）年、

〈表１〉『日本書紀』神代巻諸本被訓注字の声点一覧

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈紀	鴨脚	弘安	乾元	嘉暦	図書	明徳	丹鶴	備　考
巻一												
001.尊	そん	東 平	平			○	○	○				
002.命	めい	去	去	○		○		○				
003.葉木國	えふぼくこく	徳徳徳 平平双○ 入徳双徳	入入入	○		○	○	○				
004.可美	かび	上上 上上双	上上	○		○		○				
005.彦舅	げんきう	去上 去双上	去上	○		○	○	○		○		
006.皇産靈	くわうさんれい	平上平	平上平	○		○	○	○		○		
007.埴土	でいと	去上 ○上	(平去)上	○		○	○	○		○	○	
008.沙土	さと	平上	平上	○		○	○			○		
009.沫蕩	ばつたう	入去 徳去	入上	○		○	○	○		○		
010.橛樴	しよくくゑつ	徳徳 入入 平徳	入入	○		○	○	○			○	(外)
011.瓊玉	けいぎよく	平○	平入	○						○		
012.柱	ちゆう	去	(上去)	○		○	○	○		○		
013.少男	せうだん	上平 上上 上○	上平	○		○	○	○		○		
014.少女	せうじよ	上上 上上双	(上去)上	○		○	○	○				
015.瑞	すい	去	去	○		○	○	○		○		
016.妍哉	けんさい	平平	平平	○		○	○	○		○		
017.可愛	かあい	上去	上去	○		○	○	○		○		
018.太占	たいせむ	去平	去平	○		○	○	○		○		
019.大日霎貴	たいじつれいくゐ	去入平去 去入双平去 去入双○○	去入平去	○		○	○	○		○	○	
020.珎	ちん	平	平			○	○					

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	鴨	弘	乾	嘉	図	明	丹	備　考
021.顧眄之間	こべんしかん	上去○○ 上○○○	去（上去）（平去）	○		○	○					
022.罔象	ばうしやう	上去 上双去	上上	○		○	○	○		○		
023.天吉葛	てんきつかつ	平入入	平入入	○		○	○	○				
024 倉稲魂	さうたうこん	平上平	平上平	○		○	○	○		○		
025.少童	せうとう	上平	去平	○		○	○	○				
026.頭邊	とうへん	平平	平平	?		○	○	○		○		
027.脚邊	きやくへん	入平	入平	○		○	○	○		○		
028.熯火	せんくわ	去○	去上	○		○	○	○		○		(外)
029.而善	じせん	平去 平双去	平（去上）			○	○	○		○		(外)
030.黷	れい	平	平	○		○	○					
031.吾夫君	ごふくん	平平平 平双平平	平平平	○		○	○	○				
032.飡泉之竈	さんせんしさう	平平平去	平平平去	○		○	○	○		○		
033.秉炬	へいきよ	上上	上上	○		○	○					
034.不須也	ふしゆや	上平平 上平○	（上平）平上	○		○	○	○				
035.凶目	けうぼく	東入 平東 平入 平○	平入	○		○	○	○				
036.汚穢	をえい	平去	平去	○		○	○	○		○		
037.醜女	しうじよ	上上双 上○	上（上去）	○		○	○	○				
038.背揮	はいくゐ	去平	去平	○		○	○	○		○		
039.泉津平坂	せんしんへいはん	平平平上 ○平平上 ○○平平	平平平上	○		○	○	○		○		
040.屎	でう	去	去	○								
041.絶妻之誓	ぜつさいしせい	徳○○去	入（平去）平去				○					
042.岐神	きしん	平平 平○	平平	○		○	○	○		○		
043.檍	よく	徳	入	○		○	○	○		○		

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	鴨	弘	乾	嘉	図	明	丹	備　考
044.正勝	せいしよう	去平	去平	○		○	○	○		○		
045.雛	あん	平	平	○		○	○	○		○		
046.不屓於族	ふきおぞく	上去上入 上去○入	(上平) 去平入	○		 ○	○	 ○				
047.保食神	ほうしよくしん	上入平 上徳平 上入○	上入平	 ○		○	○	 ○				
048.顯見	けんけん	上去 ○去	上去	 ○		○	○	○		○		虫損
049.蒼生	さうせい	平平 東東	(平上) (平去)	 ○		○	○	○		○		
050.少宮	せうきゆう	上平	(上去) 平	○		○	○	○		○		
051.御統	ぎよとう	去去 去○	去去	○		○	○			 ○		
052.千箭	せんせん	平去 ○去 平○	平去	○		 ○	 ○	 ○		 ○		
053.稜威	ろうゐ	平平	平平	○		○	○	○		○		
054.蹴散	しゆくさん	入去 入○	入去	 ○		○	○	○		○		虫損
055.雄誥	ゆうかう	平去 平入	平去	○		○	○	○		 ○		
056.嘖讓	さくじやう	入去 入去双	入去	 ○		○	 ○	 ○		 ○		
057.誓約之中	せいやくしちう	去入○○ 去○○○	去入平(平去)	 ○		○	○	○		○		
058.齶然	かつぜん	入平 入平双	入平	 ○		○	○	○		○		
059.咀嚼	そしやく	去入 去徳 {上／去}入	上入	 ○		 ○	○	○		○		去←上
060.吹棄	すいき	平上 平○	平去	○		○	 ○	○		○		上←去
061.氣噴之	きほんし	去去平 去去○	去(平去) 平	○		 ○	○	○		 ○		
062.狭霧	かふぶ	入去 入去双 入○	入去	 ○		○	 ○	○		 ○		虫損
063.熯干	せんかん	去平		○		○	○					(外)

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	鴨	弘	乾	嘉	図	明	丹	備　考
064.重播種子	ちようはしゆし	平上去上 平上去○	(去平)去(上去)上			○	○	○		○		
065.毀	くゐ	上	(上去)	○		○	○	○		○		
066.和幣	くわへい	平去 平○	(平去)去	○		○	○	○		○		
067.蘿	ら	平	平	○		○	○	○				
068.手繦	しゆきやう	上上	上上	○		○	○	○		○		
069.覆槽	ふくさう	入平	入平				○					
070.神明	しんめい	平平	平平			○	○	○		○		
071.憑談	ひようたむ	平平 ○平	平平			○	○	○		○		
072.石凝姥	せきぎようぼ	入平平 入平双平双 入平上双 ○平上	入(平去)上	○		○	○	○		○		虫損
073.全剥	せんぱく	平入 平○	平	○		○	○	○		○		
074.送糞	そうふん	平去	平去	○		○	○	○		○		
075.玉籤	ぎよくさん	入平 徳双平 入双平 ○平	入平	○		○	○	○		○		
076.祓具	ふつぐ	平上双 平○	入去	○			○			○		上←去
077.手端	しゆたん	上平 ○平	上平	○		○	○	○		○		
078.吉棄	きつき	入去 ○去	入去	○		○	○	○		○		
079.神祝々之	しんしゆくしゆくし	平徳徳平 平入入平 平入入○ ○徳徳○ ○入○○	平入入平	○		○	○	○		○		
080.逐之	ちくし	徳平 入平 入○	入平	○		○	○	○		○		
081.廢渠槽	はいきよそう	去平平 去○○	去平平			○	○					
082.捶籤	すいせむ	上平	上平	○		○	○	○		○		
083.興台産霊	きようたいさんれい	平平上平	(平去)平上平	○		○	○	○		○		

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	鴨	弘	乾	嘉	図	明	丹	備　考
084.太諄辭	たいしゆんじ	去平平 去○平	去(平去)平	○		○	○	○		○		
085.轠轤然	らいろぜん	平平平 平平平双 平上平	平平平	○		○	○	○		○		
086.瑲瑲	さうさう	平○	平平				○					
087.赤酸醬	せきさんしやう	入平平 ○平平	入平去	○		○	○					平←去
088.草薙劒	さうていけん	上去去	上去去	○		○	○	○		○		
089.清地	せいち	平上	平去				○			○		上←去
090.篠	せう	上	上	○								
091.大己貴	たいきくゐ	去上去 ○上○	去上去	○		○	○	○		○		
092.棄戸	きこ	上上	去上	○			○	○		○		上←去
093.披	ひ	上	上	○		○	○	○		○		
094.顯	けん	上	上	○		○	○					
095.蹈鞴	たうひ	去去	去去			○	○	○		○		
096.幸魂	かうこん	上平 上○ 平平 ○平	上平	○		○	○	○		○		
097.奇魂	きこん	平平 平○	平平	○		○	○	○				
098.鶺鴒	せうれう	平平	平(平去)	○		○	○	○		○		
巻二												
099.大人	たいじん	上平双 去平双	去平	○				○		○		平←去
100.植	しよく	徳 入	入	○		○		○	○	○		
101.杜木	とぼく	上入双 上徳双 上○	上入	○		○		○		○		
102.天探女	てんたんじよ	平平上 平平上双 東平上双	平(平去)上	○		○	○	○		○		
103.味耜	びし	去双上 {上/去}上 ○上	去上	○		○	○	○		○		上←去
104.茀	れつ	入	入	○								

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	鴨	弘	乾	嘉	図	明	丹	備　考
105.磐裂	はんれつ	平入 平徳	平入	○		○	○	○		○		
106.經津	けいしん	平平	(平去)平	○		○	○	○		○		
107.三穂	さんすい	東去 平去	(平去)平	○		○	○	○		○		去←平
108.柴	さい	平	平	○		○	○			○		
109.船枻	せんえい	平去	去	○		○	○	○		○		
110.隈	わい	平	(平去)	○		○	○	○		○		
111.倭文神	わぶんしん	平平平 平平双平 平平双○	平(平去)平	○				○		○		虫損
112.天磐座	てんはんざ	平平上 東平上 ○平上 ○平○	平平去	○		○	○	○		○		上←去
113.立於浮渚在平處	りつおふしよ さいへいしよ	入平平平 去平上 ○○平平 ○平上	入平平上(上去)平(上去)	○			○			○		
114.頓丘	とんきう	去平 去○	去平	○		○	○	○	○	○		
115.竟國	べきこく	入入 徳徳	入入	○		○	○	○	○	○		
116.行去	かうきよ	平上	(平去)(去上)	○		○	○	○	○	○		
117.火闌降	くわらんかう	上平平 ○平平	上平(去平)	○		○	○	○	○	○		
118.可愛	かあい	上去	上去			○	○	○		○		
119.高胸	かうきよう	平平 平○	(平去)平	○		○	○	○		○		
120.頗傾也	はけいや	去平上 去平平 去平○	(平上)平(上去)	○		○	○	○	○	○		去←(平上)
121.齋主	さいしゆ	平上 東？○ 平○	平上	○		○	○	○	○	○		
122.顯露	けんろ	平上	上去	○		○	○	○	○	○		
123.齋庭	さいてい	平平	平平	○		○	○	○	○	○		
124.梔	し	平？	平	○								虫損
125.頭槌	とうつい	平平	平平	○		○	○	○	○	○		

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	鴨	弘	乾	嘉	図	明	丹	備　考
126.老翁	らうおう	上平 上○	上平	○		○	○	○	○	○		
127.熛火	へうくわ	平平 平上 平○	平上	○		○	○	○	○	○		
128.喧響	くゑんきやう	平上	平上	○		○	○	○	○	○		
129 五月蝿	ごぐゑつよう	上双入双平双 上双入双平 ○入双平 ○○平	上入平	○		○	○	○		○		
130.添山	てんさん	平平 平東 平○	平平	○		○	○	○	○	○		
131.秀起	しうき	去上 去○ 平上	去上	○		○	○	○	○	○		
132.幸	かう	平	上							○		
133.可怜	かれい	上平 ○平	上平	○		○	○	○	○	○		
134.汀	てい	平	平	○		○	○	○		○		
135.上國	しやうこく	去入 去○	(去上)入			○	○	○	○	○		
136.赤女	せきぢよ	入上双	上入	○								
137.上國	しやうこく	入徳	(去上)入	○								
138.海驢	かいろ	上平	上平	○		○	○	○		○		
139.踉蹌鉤	りやうはうこう	平平去	(平去)(去平)(平去)	○		○	○	○	○	○		
140.癡駭鉤	ちがいこう	平上去 ○上去 平上○	平上(平去)	○		○	○	○	○	○		※駭
141.八十連属	はつじふれんしよく	入入平入 ○○平入	入入平入	○		○	○	○	○	○		
142.飄掌	へうしやう	平上 平○	平上	○		○	○	○	○	○		

〈表２〉『日本書紀』人皇巻諸本被訓注字の声点一覧

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈紀	岩崎	前田	図書	北野	熱田	兼右	内閣	備　考
巻三												
001.椎	つゐ	平	平	○				○				
002.一柱騰宮	いつちうとう きゆう	入去平平 ○去平平	入上平平	○				○		○	○	去←上
003.訛	くわ	平	平	○								
004.雄誥	ゆうかう	平去 平○	平去	○				○		○	○	
005.茅渟	ばうてい	平双平	平平	○				○		○	○	
006.撫釼	ふけん	上双去 上○ 上双○	上去	○				○			○	
007.慨哉	かいさい	去平 ○平	去平	○				○		○	○	
008.戸畔	こはん	上去 ○去	上去	○				○		○	○	
009.聞喧擾之 響焉	ぶんけんぜう しきやうえん	平平上平上平 ○平上○○○	(平去)平上平 上平	○				○				
010.諾	だく	入 徳双	入	○							○	
011. 師霊	さふれい	入平 ○平	入平	○				○		○		
012.穿邑	せんいふ	平入 平○	(平去)入	○				○		○	○	
013.猾	くわつ	入	入	○				○		○	○	
014.魁帥	くわいすい	平去	平去	○				○		○	○	
015.爾	じ	去	上	○				○		○	○	去←上
016.謡	えう	平	平	?				○				
017.排別	はいへつ	平入	平入	○				○		○	○	
018.梁	りやう	平	平	○				○		○	○	
019.苞苴擔	はうしよたん	平去平 平○平	平平(平去)	○				○		○	○	去←平 虫損
020.梟帥	けうすゐ	平去	平去	○				○		○	○	
021.磯	き	平	平	○				○				
022.香山	きやうさん	平平	平平	○				○		○	○	

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	岩	前	図	北	熱	兼	内	備　考
023.平瓮	へいをう	平平	平去	?						○	○	
024.嚴瓮	げんをう	平双平 平双○	平去	○				○		○	○	
025.嚴呪詛	げんじゆしよ	平双去去 ○○去	平去去	○				○				
026.大醜	たいしう	去去	去上	○				○		○	○	
027.手抉	しゅくゑつ	上入	上入	○				○				
028.柀	ひ	上	上	○				○		○	○	
029.顯齋	けんさい	上平	上平	○				○		○	○	
030.罔象女	ばうしやうぢよ	上双去上双	上上上	○				○		○	○	去←上
031.稲魂女	たうこんぢよ	去平上双	上平上	○				○		○	○	去←上
032.壓	あふ	徳	入	○								
033.葉盤	えふはん	入平 徳平	入平	○				○		○	○	
034.倉下	さうか	平上	(平去)(上去)	○				○		○	○	
035.饒速日	ぜうそくじつ	平双入入双 平双入平双 平双徳徳双 平双入双○	(平去)入入	○				○		○	○	
036.可美眞手	かびしんしゆ	上上双平上 上上双○○	上上平上	○				○		○	○	
037.丘岬	きうかふ	平入 平○	平入	○				○		○	○	
038.坂下	はか	上上	上(上去)	○				○		○	○	
039.片居	へんきよ	去平	去平	○				○		○	○	
040.片立	へんりふ	去入 去徳	去入	○				○		○	○	
041.屯聚居	とんしうきよ	平去平	平(平去)平	○				○	○	○	○	
042.畝傍山	ぼうはうさん	上双平平 上{平/去}平 上双平上	上(平去)平	○				○		○	○	
043.珍彦	ちんげん	平去双 ○去双	平去	○				○		○	○	
044.妍哉	げんさい	平平 平東	平平	○				○		○	○	

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	岩	前	図	北	熱	兼	内	備　考
045.秀真國	しうしんこく	去平入 去平徳 去平去	去平入	○				○		○	○	
巻四												
046.春日	しゆんじつ	平入 平入双	平入	○						○	○	
047.卒川	そつせん率	入平	入平	○						○	○	
巻五												
048.神籬	しんり	平平 ○平 ○平双	平平	○						○	○	
049.掌酒	しやうしう	上上	上上							○	○	
050.物寶	ぶつじつ	入双入 入入双 入双○	入入						○	○	○	
051.滴𨏥	てきしよ	○平	入上	○								平←上
052.叩頭	こうとう	平平 平○	(去上)平	○						○	○	虫損
053.急居	きふきよ	入平 徳○	入平	○							○	虫損
054.萎	せふ	徳	入	○								
巻六												
055.板擧	はんきよ	上上	上上	○				○		○	○	
056.筱	せう※篠	上	上	○				○				
057.屯倉	とんさう	平平 ○平	平平	○				○		○	○	
058.裸伴	らはん	上上	上上	○				○				
059.神庫	しんこ	平上 ○上	平去	○				○		○	○	
060.香菓	きやうくわ	平上	平上	○				○				
巻七												
061.郎姫	らうい	平平	平平	○						○	○	
062.童男	とうだん	平平	平平	○						○	○	
063.泳宮	えいきゆう	去平 去○	去平	○							○	
064.木	ぼく	入双	入	○						○	○	

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	岩	前	図	北	熱	兼	内	備　考
065.碩田	せきてん	入平 ○平	入平	○						○	○	
066.乾	かん	平	平	○						○	○	
067.御刀	ぎよたう	上平 上双平	(去上)平	○						○	○	
068.済	せい(済)※	去	去	○						○	○	
069.叢雲	そううん	平平	平平	○								
070.孺	じゅ	平双	平	○						○	○	
071.灼然	しやくぜん	徳平双 ○平	入平	○						○	○	
巻八												
072.盾列	しゆんれつ	上入	上入	○						○	○	
073.御甑	ぎよへん	上平 上双平	(去上)平	○						○	○	
074.睩	ろく	徳	入	○								
075.无火殯殮	むくわひんれん	平上去去	平上去去	○								
巻九												
076.荷持	かち	平平	(平上)平	○						○	○	
077.希見	きけん	平去	平去	○						○	○	
078.和魂	くわこん	平平	(平去)平	○						○	○	
079.荒魂	くわうこん	平平	平平	○						○	○	
080.祈狩	きしう	平去	平(去上)	○						○	○	
081.小竹	せうちく	上入 ○入	上入	○						○	○	
巻十												
082.肖	せう	平	去	○								
083.小甑	せうへん	上平 ○平	去平	○						○	○	※少
084.派	はい	平 {平/去}	去	○						○	○	平←去
085.訕嘲	さんばう	○平	(去平)平	○								
086.葉田	えふてん	徳平	入平	○								

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	岩	前	図	北	熱	兼	内	備　考
巻十一												
087.衫子	さんし	平上	平上	○				○		○	○	
088.賢遣	けんゐ	平平	平(平去)	○				○		○	○	
089.葉	えふ	入 徳	入	○				○				
巻十二												
090.去来	きよらい	上平	(去上)(平去)	○						○	○	
091.圓	えん	平	平	○						○	○	
092.汝妹	じよばい	平双去 平双○ 平○	上去	○						○	○	
巻十三												
093.汝	じよ	平双	上	○								
094.壓乞	あふきつ	入入 徳○	入入	○						○	○	
095.戸母	こぼう	上上双 上上	上上	○				○		○	○	
096.蟻	べつ	入	入	○								
巻十四												
097.湯人	たうじん	平平双	平平	○						○	○	
098.蜾蠃	くわら	上上	上(上平)	○						○		
099.堅磐	けんはん	平平	平平	○						○		
100.廣津	くわうしん	上平	(上去)平	○						○	○	
101.典馬	てんば	上上 上上双	上上	○						○	○	
102.班鳩	はんきう	平平	平平	○						○	○	
103.香賜	きやうし	平上	平去	○						○	○	
104.談	たん	平	平	○							○	
105.蓬蘂	ほうらい	平上	平平	○						○		
巻十五												
106.黄	てい	平	平	○								
107.使主	ししゆ	上上	(上去)上	○						○		

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	岩	前	図	北	熱	兼	内	備　考
108.蘆薈	ろくわん	平去双 平{平/去双} ○{平/去双}	平去	○						○	○	
109.美飲喫哉	びいんけきさい	上双上入平 上双○○平	上(上去)入平	○						○	○	入
110.牡鹿	ぼうろく	去双入 去双徳 去○	上入	○						○	○	去←上
111.手掌摎亮	しゆしやうかうりやう	上上平去 上上平○	上上平(去平)	○							○	
112.立出	りふしゆつ	入入	入入							○	○	
113.榲	をん	平	平	○						○		
114.伐本截末	はつほんせつばつ	入上○入双 ○上○入双	入上入入	○						○	○	
115.瓮	をう	上	去	○								上←去
116.吾夫柯怜	ごふかれい	平双平○平	平平平平	○								
117.鯽	しよく	入	入	○								
118.魚女	ぎよぢよ	平双上双	平上	○								
119.白水郎瞙	はくすいろうかん	入上平去	入上平(去上)	○								
120.哭女	こくぢよ	入上双 入上	入上	○						○	○	
巻十六												
121.鮪	ゐ	上	上								○	
122.歌場	かちゃう	○平	平平	○						○	○	
巻十七												
123.荳角	とうかく	去入 去○	去入	○							○	
巻十八												
124.木蓮子	ぼくれんし	入双平上	入平上	○							○	
125.我鹿	かろく	上平双	上入	○								
126.經湍	けいたん	平○	(平去)平	○								
巻十九												
127.鞍橋	あんけう	平平	平平	○								
128.田令	てんれい	平去 平{平/去}	平(去平)	○						○	○	

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	岩	前	図	北	熱	兼	内	備　考
129.叫咷	けうたう	去平	去平	○								
130.傾子	けいし	平上	平上	○						○	○	
巻二十												
131.壺	こ	平	平	○								
132.揺震	えうしん	平平	平去	○								
巻二十一												
133.水派	すいはい	上平	上去	○								
134.赤檮	せきたう	入去	入平	○							○	
135.白膠木	はくかうぼく	入平入双 入○○	入平入	○							○	
巻二十二												
136.靭	じん	平	去	○						○		
137.罍華	けいくわ	入平	去(平去)	○							○	
巻二十三												
138.嚴矛	げんぼう	平双平双	平平	○						○	○	
巻二十四												
139.重日	ちょうじつ	去入双 去○	(去平)入	○	○					○	○	
140.水鶏	すいけい	上平	上平	○								
141.乳部	じゆほ	上双上	上上	○						○	○	
142.休留茅鴟	きうりうばうし	平平平平 ○○平双平	平平	○	○					○	○	(外)
143.蔓椒	ばんせう	○東 ○平	(去平)平	○	○					○		
巻二十五												
144.垂	すい	平	平	○								
145.兄	けい	平	平	○								
146.癬亀	せんき	平平	上平	○								平←上
147. 鯛魚	せいぎよ	○平双	去平	○						○		
148.事瑕	しか	去平 ○平	去平	○							○	
149.醜	しう	上	上	○								

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	岩	前	図	北	熱	兼	内	備　考
150.味経	びけい	上双東 〔上双/去双〕平	去（平去）	○							○	去←上
151.老	らう	上	上	○							○	
巻二十六												
152.田身山名	てんしん	平平上平 平平○○	平平平平	○				○			○	
153.傴僂	うろう	○上	上平	○								
154.平此云毗羅	へい	平上平平平 平○○平平 平○○○○	平上平平	○				○		○	○	
155.檮此云柯之	たう	平○○平平 去○○○○	平	○				○				
156.川上	せんしやう	平去	平（去上）	○							○	
157.膽振鉏	たんしんしよ	平平上	（去上）（去上） （平上）	○							○	平 ← （去上）
158.肉入篭	じくじふろう	入双入双平 徳双徳双平	入入（平上）	○						○	○	
159.問菟	ぶんと	去双平	去（去平）	○								
160.菟穂名	とすいめい	平○平	（去平）去平	○								
161.後方羊蹄	こうはうや うてい	去平平平 ○○平平	上平平平	○						○	○	去←上
162.言屋	げんをく	平双入 平入	平入							○	○	
163.幣賂	へいろ	去上	去去	○								上←去
164.熟田津	しくてんしん	○平平	入平平	○								虫損
巻二十八												
165.渟中	ていちゆう	平平	平（平去）	○							○	
166.篠	せう	〔上/平〕	上	○								
巻二十九												
167.齊忌	せいき	平上	平去	○								上←去
168.巫鳥	ぶてう	平双上 平上	平上	○						○	○	
169.椹	ちん/ぢん	平	（平上）	○								
170.肩巾	けんきん	平平	平平	○							○	
171.倭文	わぶん	平平双	平（平去）	○							○	

被注記語	よ　み	声　点	韻書四声	釈	岩	前	図	北	熱	兼	内	備　考
172.朱花	しゆくわ	平平	平平	○						○	○	
173.朱鳥	しゆてう	平上	平上	○							○	
巻三十												
174.齊	せい	平	平	○								
175.魚	ぎよ	平双 平？	平	○						○	○	虫損

厳阿写。熱田神宮蔵。

○兼右本……巻 3 ～ 30 の 28 巻（28 冊）が現存する。天文 9（1540）年、吉田兼右写。天理大学附属図書館蔵。

○内閣文庫本……巻 1 ～ 30 の 30 巻（10 冊）が現存する。慶長頃写。国立公文書館蔵。

○釈日本紀…… 28 巻。卜部懐賢（兼方）編著。文永 11 ～正安 3（1274 ～ 1301）に成立。尊経閣文庫蔵。

諸本のより詳しい書誌・依拠した文献等については、巻諸本は鈴木豊（1988）を、人皇巻諸本は鈴木豊（2003）を参照していただきたい。『釈日本紀』は前田育徳会尊経閣文庫編『釈日本紀（一）』『同（二）』『同（三）』（2003-2004，八木書店〔尊経閣善本影印集成 27-29〕）によった。

〈表 1〉〈表 2〉の各項目は以下の作業方針に従っている。

【被訓注語】…被訓注字のうち声点注記のある語の全てを見出しとした。なお若干の訓注をもたない漢音読語を含むが、その場合は備考欄に（外）と記した。

【よみ】…漢音の歴史的仮名遣いを示した。

【声点】…平声・上声・去声・入声・平声軽＝東・入声軽＝徳の六種を区別した。なお軽点についてはその注記位置によった。明らかに注記位置の誤りであると考えられるものも注記位置が平声と異なる場合は東・徳と表示した。濁音表示の双点は声調に続けて「双」字を付して示した。たとえば「平双」は平声点が双点であることを示す。一字に二声点が注記されている場合は｛平/去｝のように示した（平声点と去声点の注記）。

【韻書四声】…韻書の声調を「平」・「上」・「去」・「入」の文字で示した。韻書において同一字義で二声調をもつ字は（　）内に二声調を入れてそれを示した。たとえば（平上）は韻書において平声と上声をもつことを示す。なお韻書の四声と異なる場合に、「声点←韻書」の形でそれを示した。たとえば「上

←去」は声点が上声、韻書の四声が去声であることを示す。

【備考】…被訓注字以外の字、韻書の四声とことなる声点注記の他に、虫損により声点注記の有無の認定が行いにくい場合に限り「虫損」と注記した。

〈表 1〉〈表 2〉は『日本書紀』被訓注字の大部分を含むが表に含まれない被訓注字もある。以下にその全例を示す。

巻 1　(1)日本此云耶麻騰、(2)麓此云簸耶磨、(3)左縄端出斯梨倶梅儺波
巻 8　(4)洞此云久岐、(5)上古時俗號輌謂褒武多
巻 13　(6)盟神探湯此云區訶陁智
巻 15　(7)鹿父人名也俗呼父爲柯
巻 17　(8)中此云那、(9)開此云波羅企、(10)海中島曲碕岸也俗云美佐祁
巻 19　(11)堅鹽此云岐梅志
巻 24　(12)谷此云波佐麻
巻 25　(13)兄此云制
巻 29　(14)次此云須岐也

以上全 14 箇所の被訓注字に声点注記がないが、それらはやや後半の巻に偏在しているようでもあるが、巻一・巻八にも無注記箇所があり、その分布に特別な意味を見出すことはできない。またこれら 14 箇所の被訓注字の字音は全体として易しいものが多いようである。声点を注記するまでもなかったために無注記であるという可能性はあるだろう。『日本書紀』声点本諸本と比較すると『釈日本紀』にはより多くの被訓注字に声点が注記されている。しかし被訓注字のすべてに声点が注記されているわけではない。上記 14 箇所のうち(2)(3)(4)(6)(9)(12)(14)は「注音」として掲出されているが訓読されていて声点注記がなく、その他は「注音」に掲出されていない。このことから『釈日本紀』はそれまでの『日本書紀』研究をよく集成したが、被訓注字の声点の声点に関しては、新たに声点を加えることまでは行わなかったと考えられよう。

[3]考察

[3.1]諸本巻の異同

〈表 1〉からまず鴨脚本に声点注記がないこと、弘安本・乾元本・嘉暦本・明徳本・釈日本紀に多数の声点注記があること、図書寮本・丹鶴本には少数の声点注記があることが知られる。同様に〈表 2〉にからは前田本・図書寮本に頂点注記がないこと、釈日本紀・北野本・兼右本・内閣文庫本には多数の声点注記があること、岩崎本には 3 箇所、熱田本には 1 箇所の声点注記があることが知られる。

声点注記のまったく見られない鴨脚本・前田本・図書寮本はいずれも古本系に属する本文をもつ本であり、多数の声点注記が見られる卜部系の諸本とは大きく異なる。

〈表 3〉は『日本書紀』声点本諸本の声点注記語数を資料ごとに示したものである。まず資料全体での声点注記語数を示し、次にそのうちの双点（アクセント表示機能をもつ）注記語数と濁点（アクセント表示機能をもたない）注記語数を示した。さらに表の項目のうち「**字音**」は被訓注字の声点注記語数を示し、「**双点**」「**軽点**」は被訓注字の声点中の双点および軽点（平声軽点と入声軽点）の注記語数を示した。例数は〈表 1〉〈表 2〉に基づいて算出した。

〈表 3〉『日本書紀』諸本の声点注記語数

資料名	書写年	声点注記のある巻	声点	双点	濁点	**字音**	**双点**	**軽点**
鴨脚本	1236	2	320	2	0	0	0	0
弘安本	1286	1・2	1120	14	0	125	0	8
乾元本	1303	1・2	1520	20	1	128	11	9
嘉暦本	1328	1・2	1120	42	0	117	15	4
図書寮本（神代）	南北朝頃	2	160	10	0	22	0	2
明徳本	1391	1・2	820	72	0	109	13	2
丹鶴本	1306	1・2	10	1	0	3	1	0
釈日本紀（神代）	1300 頃成立	巻二（注音）	—	—	—	127	15	16
岩崎本	平安中期末	22・24	550	0	0	3	0	0
前田本	平安後期	11・14・17・20	3350	0	0	0	0	0
図書寮本（人代）	院政期頃	12 ～ 17・21・24	2200	0	0	0	0	0
北野本（1 ～ 4 類）	院政～室町	3・6・9・17 ～ 21・24	2100	81	0	54	8	0
熱田本	1375 ～ 1377	1 ～ 10・12 ～ 15	1650	4	0	1	1	0
兼右本	1540	3 ～ 30	6350	100	68	103	23	0
内閣文庫本	慶長頃	(1・2)・3 ～ 30	5790	200	7	116	23	0
釈日本紀（人代）	1300 頃成立	巻二（注音）	—	—	—	170	58	16

諸本残存巻と声点注記のある巻には多寡があり一様ではないが、被訓注字に注記された声点に関しては、神代巻では鴨脚本、人皇巻では前田本・図書寮本に被訓注字に対する声点注記が見られず、古本系諸本には声点注記がまったくないあるいは少数であるのに対して卜部本系の諸本には多数の声点注記がある見なすことができよう。次に声点注記のある資料についてみたとき、諸本間で声点注記に異同がある場合でも、すべての被訓注字に注記するか一部の文字に注記するかの違い、濁音を示す双点注記があるかないかの違い、平声点と平声軽点あるいは入声点と入声軽点との違いが大部分を占めており、声点の注記位置が大きく異なっていることはない。このことから諸本の被訓注字の声点は同一系統であると結論づけられよう。濁音表示のための双点は差声当初は存在せず、後のある段階で加えられたものである。

[3.2]韻書の四声と合致しない声点注記

韻書四声との比較。機械的な差声か。六声体系だったか。韻書と異なる例の解釈。書記訓読史上の被訓注字の声点。漢風諡号の声点。

韻書の四声と合致しない声点注記がある例は〈表 1〉では通しNo. 59・76・87・89・92・99・103・107・112・120 の 10 例、〈表 2〉では通しNo. 2・15・19・30・31・51・84・110・146・150・157・161・163・167 の 14 例である。これらについてより具体的に示せば以下のようになる。

①韻書の去声字に対して上声の声点注記がある例…〈表 1〉No. 76・89・92・99・103・112 の 6 例、〈表 2〉No. 150・163・167 の 3 例。

②韻書の上声字に対して去声の声点注記がある例…〈表 1〉No. 59 の 1 例、〈表 2〉No. 2・15・30・31・110・161 の 6 例。

③韻書の去声字に対して平声の声点注記がある例…〈表 1〉No. 87 の 1 例、〈表 2〉No. 84 の 1 例。

④韻書の平声字に対して去声の声点注記がある例…〈表 1〉No. 107 の 1 例、〈表 2〉No. 19 の 1 例。

⑤韻書の上声字に対して平声の声点注記がある例…〈表 2〉No. 51・146 の 2 例。

⑥韻書の（平上）声字に対して去声の声点注記がある例…〈表 1〉No. 120 の 1 例。

⑦韻書の（去上）声字に対して平声の声点注記がある例…〈表 2〉No. 157 の 1 例。

以上全 23 例のうち①去→上が合計 9 例、②上→去が合計 7 例であり、韻書と声点の四声が異なる例のうち去声と上声間の相違となっているものが 16 例をを占めている。理由として（1）移転の際の誤写、（2）講師の音読した声調の誤った聞き取り、（3）中国語における全濁上声字の去声化を反映、（4）日本語における一音節去声字の上声化の反映（佐々木勇（1987）などを参照されたい）等が考えられよう。

上記①韻書の去声字に対して上声の声点注記がある字を示すと「具」「地」「棄」「大」「味」「座」「味」「賂」「忌」、また②韻書の上声字に対して去声の声点注記がある字を示すと「咀」「柱」「爾」「象」「稲」「牡」「後」となる。(3)(4)に該当しそうな字もあるが、例数が少なく、一定の傾向を読み取ることは難しそうである。ここでは上声と去声間において韻書の四声を逸脱する声点注記がなされやすかったのだろうと推定するに留めておく。

[3.3]差声方式

現存する『日本書紀』声点本諸本には漢音声点にはその位置が〈東〉あるいは〈徳〉に相当するものが存在する。しかしそのすべてが実際に平軽点あるいは入声軽点を表しているわけではなく、一部の声点は単に注記位置が不正確であるために見かけ上の〈東〉〈徳〉点であるにすぎない。被訓注字の声点が本来は六声体系で、平声軽と平声重の位置を厳密に区別していた可能性はあるが、岩崎本を除くと現存諸本では声点の注記位置は厳密とはいいがたい。ただし〈表 1〉№.003・010・107 などのように複数の資料で揃って軽点注記が見られる例があり、これらは本来の軽点注記を今に伝えている可能性がある。

一方、岩崎本の声点注記位置は正確で、平声点と平声軽点、入声点と入声軽点とが厳密に注記し分けられている（鈴木豊(2008)参照)。岩崎本の被訓注字声点は巻 24 のわずか３例にとどまるが、そのうちの〈表 2〉№.143「曼椒〈○東〉」の例から岩崎本被訓注字声点の差声方式は六声体系であったことが知られる。築島裕・石塚晴通(1978)ではこの箇所〈平平〉の認定であるが、声点の位置は「椒」字の第三画末端に位置している。岩崎本の平声点は木偏をもつ仮名の第二画末端に注記されているので、№.143 の「椒」字に注記されている声点は平声軽点と認定して問題ないだろう。軽点が注記されていることは被訓注字の声点が韻書だけに基づいた機械的な注記ではなく、実際の漢音声調に基づくか漢音声調の軽点の知識をもつ者によって注記されていること示している。兼右本・釈日本紀の声点注記は「曼」字に声点がないことから、おそらくは本来の〈○東〉を〈○平〉で写したものと考えられる。岩崎本以外の諸本では神代巻諸本・人皇巻諸本いずれも軽点の注記位置が不正確であり、移点者が軽点の意味を正確に理解していたとは考えられない。

[3.4]声点の注記時期

『日本書紀』諸本に注記されている声点は日本紀講書と密接な関係をもつ。また講書が行われなくなってからは卜部家や神祇伯家を中心として書記研究が行われ、声点も他の訓点と同様に移点され研究の対象として扱われた。成立から長期にわたって研究対象となってきた『日本書紀』であるが、被訓注字に注記された

声点はいつ誰の手によって注記されたものだろうか。

鈴木豊(2005)において『弘仁私記』序の「以丹点明軽重」は万葉仮名の和訓に声点を施した証拠と見なしうることを論じた。講書においては声に出して読むことが重要であり、それによって師説（講書を司る博士の説）は伝授されたのである。博士・尚復は被訓注字も漢音四声を伴って音読したはずである。そのために声点が差され、また講書を通じてその声調が筆録され伝授されていっただろう。このように被訓注字に声点を注記することは講書を通じて始まったと考えられるが、現存する『日本紀私記』の記事に被訓注字の声調を問題とするものはない。しかし[3.3]で考察したように、岩崎本に平声軽点注記が存在することから、単に韻書の枠組みによって機械的に声点を注記したのではないことが知られる。講書を通じて、おそらくは難読字から、被訓注字に声点が注記されていったのだろう。

[3.5]岩崎本の価値・重要性

岩崎本の声点は他の『日本書紀』声点本と比較したとき、声点の注記位置が正確であるという点において隔絶した価値をもつ。残存巻が二巻に過ぎないことや傍訓に声点注記がないことなどにおいては前田本・図書寮本等に見られる大量の声点注記資料に劣るが、その質において他の資料の追随を許さない。その声点の質の高さは軽点の意味を理解した移点者により平声点と平声軽点が、また入声点と入声軽点とが識別できるように注意深く記されていることによって保証されている。他の資料では両者の注記位置が曖昧になっているか、全く区別されていない。岩崎本において被訓注字の声点は巻 24 の三箇所のみであるが、そこから岩崎本が書写された（声点が移点された）平安時代中期末当時、(1)被訓注字の声点が注記されていた、(2)声点注記のない被訓注字も存在した、(3)被訓注字の声点の中に軽点が存在した、(4)被訓注字の声点に双点注記はなかったことが知られるのである。特に軽点の有無については[3.3]で見たように、その注記位置が正確であることによりわずか 1 例の注記でもその存在を確定することが可能となるのである。岩崎本の声点について詳しくは鈴木豊(2008)を参照していただきたい。

[3.6]漢風諡号の声点

〈表 4〉は漢風諡号に注記された声点を各資料の異同を一覧できるように整理したものである。諸本の略称は〈表 1〉〈表 2〉に同じ。被訓注字声点の考察を補足する資料である。備考欄に記した呉音・漢音は諡号に注記されている声点によって判定したものである。岩崎本・前田本・図書寮本に声点注記がまったくないのに対して、釈日本紀・兼右本・内閣文庫本ではほとんどの漢風諡号に声点注記が見られる。兼右本では双点注記が見られないのに対し釈日本紀と内閣文庫本では多数の双点注記が見られる。被訓注字の声点では兼右本でも双点注記が一般的

〈表 4〉『日本書紀』人皇巻諸本漢風諡号の声点一覧

諡　号	よ　み	巻	声　点	韻書声調	釈紀	岩崎	前田	図書	北野	熱田	兼右	内閣	備考
01.神武天皇	じんむてんわう	3	去平去上 去双平去上	平上平平	○				○		○	○	呉音
02.綏靖天皇	すいぜいてんわう	4	平平○○ 平平双○○ ○平○○	平(上去)	○						○ ○	○	?
03.安寧天皇	あんねいてんわう	4	平平○○	平平	○						○	○	漢音
04.懿徳天皇	いとくてんわう	4	平入○○ 平去○○	去入	○						○	○	?
05.孝昭天皇	かうせうてんわう	4	去平○○	去平	○						○		漢音
06.孝安天皇	かうあんてんわう	4	去平○○	去平	○								漢音
07.孝霊天皇	かうれいてんわう	4	去平○○	去平	○						○	○	漢音
08.孝元天皇	かうぐゑんてんわう	4	去平○○ 去平双○○	去平	○						○	○	漢音
09.開化天皇	かいくわてんわう	4	平上○○	平去	○						○	○	漢音か
10.崇神天皇	しうじんてんわう	5	平去○○ 平去双○○	平平	○						○	○	漢音か
11.垂仁天皇	すいにんてんわう	6	平平○○ ○平○○	平平	○				○		○		漢音か
12.景行天皇	けいかうてんわう	7	上平○○	上(平去)	○						○	○	漢音
13.成務天皇	せいむてんわう	7	去平○○ 去双平○○	平(去上)	○						○	○	呉音か
14.仲哀天皇	ちうあいてんわう	8	去平○○	去平	○						○	○	漢音
15.神功皇后	じんぐうくわうごう	9	去双上双平双去双 去双去双平去 去双○○○	平平	○					○	○	○	呉音
16.應神天皇	おうじんてんわう	10	平去○○ 平去双○○ 平双去双○○	(去平)平	○				○		○	○	呉音か
17.仁徳天皇	にんとくてんわう	11	平入○○	平入	○				○		○	○	呉音か
18.履中天皇	りちうてんわう	12	平上○○ 上上○○	上(平去)	○						○	○	?
19.反正天皇	はんぜいてんわう	12	平平○○ 平平双○○	(上平)(去平)	○						○	○	漢音

諡　号	よ　み	巻	声　点	韻書声調	釈紀	岩崎	前田	図書	北野	熱田	兼右	内閣	備考
20.允恭天皇	いんぎようてんわう	13	上上○○ 上上双○○	上上	○						○	○	漢音か
21.安康天皇	あんかうてんわう	13	平平○○	平平	○						○	○	漢音
22.雄略天皇	いうりやくてんわう	14	○入○○	平入							○	○	漢音
23.清寧天皇	せいねいてんわう	15	平平○○	平平	○						○		漢音
24.顕宗天皇	けんぞうてんわう	15	平平双	上平	○								呉音か
25.仁賢天皇	にんけんてんわう	15	平双平	平平	○								漢音
26.武烈天皇	ぶれつてんわう	16	上徳○○ 上双入	上入	○						○		漢音
27.継体天皇	けいたいてんわう	17	平平○○	去上	○							○	呉音か
28.安閑天皇	あんかんてんわう	18	平平○○	平平	○						○	○	漢音
29.宣化天皇	せんくわてんわう	19	声点なし	平去							○	○	*漢音
30.欽明天皇	きんめいてんわう	19	平平○○	平平	○						○	○	漢音
31.敏達天皇	びたつてんわう	20	上去○○ 上双入双○○	上入	○						○		漢音
32.用明天皇	ようめいてんわう	21	去平○○	去平	○						○	○	漢音
33.崇峻天皇	すしゆんてんわう	21	平去○○ 平去双○○	平去	○						○	○	漢音
34.推古天皇	すいこてんわう	22	平上○○	平上	○								漢音
35.舒明天皇	じよめいてんわう	23	平平○○	平平	○								漢音
36.皇極天皇	くわうぎよくてんわう	24	去入○○ 去入双○○	平入	○						○	○	?
37.孝徳天皇	かうとくてんわう	25	去入○○	去入	○							○	漢音
38.斉明天皇	さいめいてんわう	26	平平○○	平平	○								漢音
39.天智天皇	てんちてんわう	27	去平○○ 去平双○○	平去	○						○	○	呉音
40.天武天皇	てんむてんわう	28	去平○○	平上	○						○	○	呉音
41.天武天皇	てんむてんわう	29	声点なし	平上									
42.持統天皇	ぢとうてんわう	30	上上○○ 上双上双○○	平(去上)	○						○	○	呉音

であったことをのぞけば被訓注字と漢風諡号に注記された諸本の声点の状況はほぼ一致しているといえよう。

漢風諡号の声点には明らかに漢音声調を反映しているもの、呉音声調を反映していると考えられるもの、漢音・呉音のいずれの声調を反映しているかすぐには決定できないものがある。被訓注字の声点が例外なく漢音声調を反映している点で事情は異なる。漢風諡号がどのようにして成立したかについても確実な記録は存在せず、『釈日本紀』に引かれている私記にある淡海三船撰の記事を元に成立事情が推定されている。これに関しては坂本太郎(1932)などをはじめとする研究がある。また漢風諡号がどのように読まれてきたのかについても、それを明らかにすることは難しい。漢風諡号に注記された声点は各種読み癖注記などとともに、その実際の「よみ」を知るための証拠となるだろう。たとえば〈表 4〉№. 15 は神功皇后に熱田本で〈去双上双平双去双〉の声点注記があり、「じんぐうぐわうごう」のよみがあったこと、№. 42 持統天皇の内閣文庫本の声点は〈上双上双〇〇〉であり、「ぢどう」のよみがあったことなどが知られるのである。

[4]おわりに

現存『日本書紀』声点本中に見られる被訓注字に注記された声点は韻書の枠組みに一致するものであり、諸本間の異同も少ないことからおそらくそれらの声点は同一系統に属するものである。岩崎本の注記例より、本来は平声・入声の軽重を区別し、清濁を区別しない単点のみの注記だったことが知られる。

『日本書紀』被訓注字の声点および漢風諡号の声点の検討を通じて、資料ごとに注記の有無や多寡があることが明らかになったが、それはどのような理由によるのだろうか。小論の考察を踏まえて以下に『日本書紀』声点本の成立事情について推測を試みたい。『日本書紀』声点本は講書の成果の蓄積そのものであるといえる。七度の講書を通じて、講義を行う博士によって、あるいは講義に参加した者によって『日本紀私記』が作成された。それらの私記に記された万葉仮名訓は片仮名訓に改められ、書紀本文に傍訓として声点とともに移された。概略このような過程を経て『日本書紀』声点本は生まれたと考えられる。鴨脚本・岩崎本・前田本・図書寮本等の古本系統の声点本は声点本が生まれた頃の姿を比較的よく残しているといえよう。それに対して卜部本系統の諸本や釈日本紀の声点はすでに存在した声点本の声点を集成したものと考えられる。康保の講書が中断したまま再開されなかったことはすでに書紀学が衰退していたことをうかがわせ、講書の成果が訓点本の形で完成するとますますその傾向は強まっただろう。卜部系

の『日本書紀』諸本や『釈日本紀』において軽点の位置が曖昧になっていることにそのことが顕著である。

文　献

坂本太郎(1932)「列聖漢風諡号の撰進について」,『史学雑誌』43-7　※坂本太郎(1964)『日本古代史の基礎的研究 下 制度篇』東京大学出版会に再録

佐々木勇(1987)「呉音一音節去声字の上声化の過程」,『鎌倉時代語研究』10, 鎌倉時代語研究会

鈴木　豊(1988)『日本書紀神代巻諸本　声点付語彙索引』, アクセント史資料索引第7号, アクセント史資料研究会

鈴木　豊(1992)「『日本書紀』声点本における濁音標示」,『辻村俊樹教授古稀記念日本語史の諸問題』, 明治書院

鈴木　豊(2003)『日本書紀人皇巻諸本　声点付語彙索引』, アクセント史資料索引第19号, アクセント史資料研究会

鈴木　豊(2005)「『弘仁私記』序の「以丹点明軽重」―『日本書紀』声点の源流を求めて―」,『論集Ⅰ』, アクセント史資料研究会

鈴木　豊(2008)「岩崎本『日本書紀』声点の認定をめぐる問題点」,『論集Ⅳ』, アクセント史資料研究会)

築島裕・石塚晴通(1978)『東洋文庫蔵 岩崎本 日本書紀』, 日本古典文学会

―文京学院大学外国語学部―